

Faulkner: The Sound and the Fury について

藤 井 昌 子

William Faulkner は、その周到な技巧をもって、四人の兄弟、即ち、**Quentin, Caddy, Jason, Benjy** を中心に、南部の名門、**Compson** 家の没落の過程を描いて、一つの傑作を世に送った。上梓の運びに到る迄には、三年の月日を要した⁽¹⁾と言われるだけに、心憎い程の手堅さを示している。

此の作品は、躊躇なく、四つの部分に分ける事が出来る。即ち、1928年4月7日の **Benjy** の話、1910年6月2日の **Quentin** の独白、1928年4月6日の **Jason** による説明、それに、その翌々日4月8日の記録、のそれである。各部分の構成は、四つの独立した物語と考えてもいい程に、見事なものであり、然も、互に密接に結びついている。章を重ねる毎に、物語の全貌は、次第に鮮度と深みとを増し、崩れ行く **Compson** 家の悲劇と、その悲劇の持つ意味を、明確に、立体的に表明して余す所がない。

第一章の **Benjy** の章については、多くの批評家が、様々な解釈を下している所であつて、論ずべき点も少くない。**Benjy** は、当年33才の白痴であり、言葉を操る力も、理解する能力も殆ど持っていない。**Compson** 家の末子であり、唯、感覚だけの世界に生きている。彼の外貌は、
“ …His skin was dead looking and hairless; dropsical too, he moved with a shambling gait like a trained bear. His hair was pale and fine. It had been brushed smoothly down upon his brow like that of children in daguerrotypes. His eyes were clear, of the pale sweet blue of cornflowers, his thick mouth hung open, drooling a little…”⁽²⁾

によつてよく表わされている。

そもそも、**Faulkner** は、何が故に、日附順に並べずに、此の特殊な人物の話を、物語の冒頭に持つて来なければならなかつたのであろうか。これは、**Cowley** 以来、多くの人が、疑問とするところであつた。1928年4月7日は、復活祭の前日であり、そして又、或る重大事件が、**Compson** 家に起る丁度前の日に当るのもあるが、この場合、日附そのものには、さして大きな意味はなさそうである。何となれば、その内容は、この一日に、**Benjy** の心に去来した主な出来事を、そのままに記録したに過ぎないからである。それは、1898年から1928年に至る凡そ30年間の、過ぎし日の断片的思い出の数々である。

此の点について、**Bowling** は

“……it is the whole novel in miniature. It represents all the main characters in situations which foreshadow the main action. This is particularly true of the recalled water-

splashing episode which took place when Caddy was seven, Quentin nine, Jason about five and Benjy about three.”⁽³⁾

と指摘し、Vickery も亦、“此れ等五人の出来事は、四人の子供達の代表的態度を啓示したものである。”⁽⁴⁾と述べている。何れも当を得たものであると思われるが、私は更にもう一つ、Compson 家の崩壊と言う主題そのものが、この章のみならず、他の章の位置と意味とを決定した事を付け加えたい。変貌し、移り行く姿は、不変不動なるものとの対比によつて、より効果的に捉えられ、又、その悲劇性は高揚される。

Benjy は、30年の長年月、知識の窓を固く閉ざされたまま、幼児の頃と同じ感覚の世界に住み続けている。彼の特殊な嗅覚と、やさしく澄み切つた目、然し、現象以上の意味を、何一つ読みとる事は出来ない。彼の前には時間と雖も、如何なる意味も持たない。従つて、その思い出のフラッシュは、現在から過去へ、過去から現在に、かと思うと、再び過去へ、更にその又過去にと、自由に、こだわりなく移つて行く。彼にとつて、年代的な時間の後先など、問題にならない。かくして、彼は、長期に亘る思い出の一こま一こまを、幾つものに寸断して、我々の前に展開してみせる。それは、何枚にも描かるべきものを、ただ一枚の紙に、雑然とかき並べた絵を思わせる。それは定かに見ようとすれば、いよいよ掴み所のない混濁の世界に転じる。然しその中に、Caddy の姿は、はかなく、美しく、刹那的に浮き沈みして、読者の胸をあやしく波立たせる。Caddy は、幼児から少女へ、そして大人へと、次第に成長して行く。そこには、変り行く姿に、焦点を合わせようとして、しかも合せ得ないもどかしさがある。そして、それが又、垣間みえる対象を、より美しく見せる不思議な効果を生んで行く。変化する者の姿を、固定したレンズにとどめようと努力する事の空しさ。其のはかなさ、悲しさが、そこはかたなく読者の心を揺するるのである。

此の章に於ける Caddy は、あくまでも、Benjy の感覚を通してのものである。Benjy が大好きな Caddy は、木の香りがした。そう言う Caddy はいつも、彼を保護し、安眠させてくれた。こんな彼女について述べる時、彼は必ず “She smells like a tree.” と付け加える。木の香りを失つた Caddy は、彼の平和を脅すものであり、眠を妨げるものでもあつた。 “She smells not anymore.” “She smells rain.” と言う事は、やがて、彼女が、彼の世界から、姿を消して行く事を意味し、彼の心をかき乱すものであつた。Benjy の愛したものは、牧場であり、木の香りであつた。暖炉の火であり、安らかな睡眠であつた。これ等のものを背景として、Caddy は、何と、はかなく、美しく、又あどけなく、牧歌的に捉えられている事であろうか。此の純粹無垢な、やさしい Caddy、それは、誰でも、唯ひたすらに、長く留めおきたいと願うであろう。この様な Caddy についての前提があつて、始めて、第二の章に於ける Quentin の苦しみも、又空しい努力の意味も、ともに理解出来るのである。Quentin の独白の書の前に、Benjy の章を置かねばならない必然性が、ここにある。

Faulkner は、雰囲気や壊す事なく、此の混濁たる場面を、理解し易くする為に、或時は

イタリックを用いて、一つの場面から、他の時限の連想に移る事を示し、又或る時は、一つの事件とか、一つの変化に対して、それと同種の経験の伴うある過去に、その思い出を辿ると言う風に、読者が無意味な混乱に悩まされぬよう、その細心の工夫を施しているが、それ等は、十二分にその役を果している。

第二章に於ける **Quentin** は、**Compson** 家の長男であり、その知性は人一倍高い。彼の **Harvard** 入学の費用には、**Benjy** の牧場が処分され、その一部が当てられたのであつた。此の章の日附は1910年6月2日、大学生生活一年も、終りに近い或る一日の事であつた。

時間が、何の意味も持たない世界に、**Benjy** は住んでいた。それに反して、時間に、絶えず制約を受けねばならないのが、この **Quentin** なのである。朝の起床から、自殺のため、その夜、彼の部屋を離れる迄、時計の音や、時間への意識によつて、彼の思考や行為は、容赦なく寸断される。**Benjy** は、一つの感覚的体験から、過去のある場面を連想する。**Quentin** の場合は、これと逆に、時計の音や、時間への意識は、ある過去の思い出から、現在へと、彼を引き戻すのである。**Benjy** の世界が、感覚のレンズを通して、形成されたものであるならば、**Quentin** のそれは、抽象的観念のレンズに依つて、作られたものなのである。従つて彼は、絶えず、自分自身に話しかける。即ち独自の形式で話す。始めは、現在と過去は、適当な均衡を保っているが、次第に過去が優勢となり、やがては、その大部分を占めて行く。然し乍ら、又、現在から全く脱れ去る事も出来ない。過去と現在の衝突が、やがては、彼を自殺へと導いて行くのである。**Bland** との喧嘩のいきさつは、現在と過去との混乱の過程を示すものであり、彼の破滅が、決定的である事を暗示する。その過程こそ **Benjy** とは異なるけれども、**Quentin** も、次第に、同じ様な時の混乱状態の中に落ち込んで行く。真に興味深いものがある。

前章に於けると同様、こゝでも亦、**Caddy** がその中心となり、重要な役割を果している。**Compson** 家の名誉は、過去の栄光を基礎として立つている。**Quentin** は、これを誇りとし、その名を長く維持して行く事を念願としている。彼の世界観は、総て、その上に深く根を下ろしている。彼が、**Harvard** に入学したのも、その一つの表われである。一方、彼は、妹の **Caddy** をこよなく愛した。**Caddy** も亦、彼を深く愛した。彼は、妹を心の支えとも思い、かけがえのないものとして、大切にいとしんだ。従つて、彼の関心が、**Caddy** に集中するのは当然である。然るに、やがて、自然の激しい力に打ち勝てない女性として、**Caddy** は成長した。彼女の恋愛も、結婚も、彼の夢を破壊するものに外ならなかつた。**Caddy** の行動は、本能の姿を如実に表わすものであり、**Compson** 家の名誉を傷付けるもの、真に恥すべき行為としか思えなかつた。彼は、自分の世界が、根底から揺らぐのを感じた。**Caddy** の人間性と言う立場から、自己の世界観を、今一度、新しく立直すための心の余裕が、彼にはなかつた。彼の世界の秩序は、不動のものであり、これを破壊する事は出来なかつた。一方、彼の努力にもかかわらず、**Caddy** は、今や、罪の深淵に沈み、彼と同じ世界には、到底、引き戻せそうにもなかつた。そこで、**Caddy** と共に生きるには、彼女と等しく、彼自らも罪を犯す道しなかつた。彼

は、カトリック思想の中の、永劫に果てる事なき刑罰と言う観念に、心惹かれた。作者の言葉の中にある様に

“...[he] loved not the idea of the incest which he would not commit, but the idea of the concept of the eternal punishment.”⁽⁵⁾

即ち、たとへ、永劫の刑罪と言う最高の重刑を受けようとも、他から永久に孤立して、二人だけで生きる事を許されるならば、それで彼は満足であつた。

此の様にして、重罰を受ける為に、彼は、どうしても、incest なる大罪を犯す必要があつた。その為に、彼は、罪を犯したと自ら言葉で繰り返す事によつて、その罪が犯された事を、自他共に信じ込ませねばならなかつた。幼少の頃、Caddy と共に叱られ、二人きりで、同じ経験を分かち合いたいが為に、彼自ら進んで、同じいたずらをした事があつた。incest を思いつかせたものは、これと同種の愛情であつた。罪があつて、罰が科せられると言う世の法則とは、逆行するものであつた。自然の暴力、本能の力を代表する Caddy を、観念の秩序の中に、住ませようとしたのである。所詮、不可能な事と言わざるを得ない。彼の父が言つた様に、“You are still be blind to what is in yourself...” 彼は自分自身を知らなかつたのである。

彼は父の “... a man is the sum of his misfortunes. One day you'd think misfortune would get tired, but then time is your misfortune.”⁽⁶⁾

と言う言葉も、観念の上では、十分理解出来たし、又 “I give it [watch] to you not that you may remember time, but that you might forget it now and then for a moment and not spend all your breath trying to conquer it.”⁽⁷⁾ の教訓もよく理解出来た。人は時と戦つても、勝つ事は出来ない事も、よく解つていた。然し実際に、その真理を認め、これに従つて行く事は出来なかつた。時と共に、総べては移り行くものと言う事実を、どうしても認めたくなかつた。彼は時間に拘泥し、抵抗した。やがて、抵抗の空しい事を認めざるを得なかつた。Caddy の運命は、も早や、彼の手には負えるものではなかつた。彼は、自らの存在を否定する事によつて、Caddy をも永遠の無と化し、その罪もろともに葬り去ろうと決心した。絶え間なく、進行し続ける時の営みを、永遠なるものに代えようとして、彼は自ら死を選んだ。然し、その死の僅か15分前に於いても、時間を意識し、その変化を予測しないではいられなかつた。皮肉と言わざるを得ない。

こゝでも、Benjy の場合と同じく、Caddy は、常に彼の思考の中心となつている。然し、も早や、可憐な少女ではなくて、豊満なむせる様な女性である。Benjy の Caddy は、木の香りであつたが、Quentin のそれは、すいかづらであり、バラである。本能の盲目的力を代表し、夜と不安を表わすものとして扱われる。刹那刹那の本能のままに Caddy は動く。その豊満な姿を捉えるのに、固定した観念と言うレンズしか、Quentin は用意していない。即ち、

Benjy は、感覚上の彼自身の実際の体験から、非常に限られたものではあるが、或る秩序を生み出し、その上に安住している。その秩序が乱される時、怒りの叫びを上げ、これに抗議する。Quentin は、体験や事実の裏付なしに、観念の枠の中に、自他の経験をはめ込もうとする。そこに、彼自ら破れ去らねばならぬ秘密がある。Benjy と Quentin との対比は真に至妙である。こゝにも Faulkner の技巧の一端がうかがわれる。

第三章に於いては、Jason によつて、前章から約18年後の、Compson 家の一日が語られる。Quentin の氣負いたつた死の抗議にもかゝらず、時間は間断なく、Compson 家崩壊の工作を続けて行く。Caddy はその家を去り、Compson 氏も今は亡く、Jason がその後を継いだ。彼の支配の下に、Compson 夫人と、Caddy の子 Quentin, それに Dilsey が共に生活を続けている。Jason は、Compson 家の二男で、Quentin, Caddy の弟に当る。兄の様に大学教育は受けなかつたが、自力で、Memphis の学校に通い、棉花に関する一通りの知識を獲得、現在は、町の雑貨商に勤めている。

此の Jason の話は、前二者のそれより、遙かに理解し易い。独白と言うよりは、客観的説明とでも言いたい様式である。如何にも實際家らしい表現形式である。彼の“Once A Bitch Always A Bitch, What I Say.”⁽⁸⁾ の書き出しは、彼の持ち味を端的に表わしている。自己の健全さを誇り、その理論と判断には、絶対の自信を持っている。然し、人間性の飛躍とか、急転などと言う事は、彼の理解の外にあると言わざるを得ない。尊大そのもの、自分に対する懐疑など、聊かも持ち合せていない。“I say I don't need any man's help to get along I can stand on my feet like always I have.”⁹⁾ 実に傲慢と言うべきである。

彼は、総て、利害得失で割切つて行く。Caddy の行爲については、Quentin は死をもつて抗議したが、Jason には、有利な勤口を失つた原因として意味があるのであつて、一家の名誉の面では、彼は大して問題にもしていない。従つて、Caddy から、その子 Quentin の養育を頼まれた時も、“…… instead of me having to go way up north for a job they sent the job down here to me……”⁽¹⁰⁾と、皮肉まじりにしろ、割り切つて此れを引取る。寧ろ、この機会を利用し、昔受けた損害を取り戻そうとする所に、彼の本領を發揮している。Caddy に、吾が子の Quentin を会わせる事にも、たゞではすまさない。総てが取引である。給料に相応する分だけ働く。父に代つて、家族の世話をするかわりに、家族の者達が、彼に奉仕し屈従する事を要求する。彼が最も恐れているのは Dilsey であるが、彼女に対してすら、“At least I'm man enough to keep that flour barrel full, and if you do that again, you wont be eating out either.”¹¹⁾ と命令し、威しつける。

彼が信じるものは、現在掌中にあるもの、ポケットの内に持っているものだけである。彼は、何によらず、契約によつて、まず、自分の利益を確保する。それ以上のものも、それ以下のものも、彼は信じようとはしない。人間関係も、総て、契約によつて成り立っている。彼は誰を

も信じる事は出来ない。従つて、彼が一番頼りにするものは、人知れず貯え、嚴重に、自分の手で蔵い込んだお金である。ポケットの中に握りしめたお金、それこそ、彼の世界を最もよく表わすものである。しかもそれは、過去のものでもなく、未来のものでもなく、現在を意味するものである。それこそ、絶対であり、不動の世界なのであつた。

Caddy の子、Quentin は、所謂、賠償の人質である。おろそかには出来ない理由がそこにある。一方、又、此の Quentin は、彼に一抹の不安を与えるものでもあつた。何故ならば、彼女の後には、Caddy が控えており、その行動が、彼の不正行為を、いつ暴露するかわからないからである。赤ネクタイも亦、彼にとっては、心配の種となつた。何故ならば、彼の大切な人質を、どう唆かすかわからないからである。Caddy は過去の象徴であり、赤ネクタイはその未来を意味するものであつた。従つて Quentin は常に、過去と現在を内包するものであり、不安を象徴するものであつた。

やがて、第四章で明かにされる所であるが、思いもかけぬ Quentin の出来心は、彼の現実的不動の世界を、文字通り震駭させた。彼が、合法的ではあろうが、危険を犯し、営営として貯えたものを、Quentin は、あつと言う間に、かすめ盗つたのである。然も、表立つて、その金額を問題に出せない様な、不正なお金である。即ち、もともと、当然、Quentin の所有であるべきものである。彼は苦杯を舐めさせられた。此の皮肉な出来事は、彼にとつて、正に、晴天霹靂であつた。然し、幸か不幸か、彼の世界は、現実立脚していた。そして、少くとも、彼は現在と言う時に対しては、従順であつた。従つて、彼は、兄の Quentin の様に、みじめに敗れ去りはしなかつた、彼の世界を支える屋台は、全壊を危く免かれたのである。お金は、永久に戻らなかつたけれども、彼を脅す原因であつた Caddy と、その子 Quentin は永久に彼の前から消えて行つた。彼が恐れた赤ネクタイも同様であつた。彼は、過去と未来から解放された。Jason は Compson の唯一の後継者として生き残つた。

それならば、作者は、Compson 家の再興者として、Jason に、その希望を托したのであろうか。Jason には、Compson 家最後の、しかも子のない未婚者と言う、いわば致命的の条件がついている事を忘れてはならない。たとえ、彼が生き残り、営々として、現在の生活を充実して行くとしても、所詮は、空しい努力に過ぎないのではないであらうか。やがては、彼も亦、自らの秩序のために、自らを減して行かねばならない。彼は、愛情と信頼と犠牲に生きる生活、人間らしい生活について、考えてみた事もなかつた。彼の孤立の道が果てる時、Compson 家も亦、永久に、歴史の彼方に消え去る事であらう。Jason は、自己の判断と、その論理を恃むの余り、客観的に、その道を見透す事が出来ない。彼は過去、未来から、解放されたのではなく、絶縁されたのであつた。彼の戦も、結局は敗北に終るものゝ様である。彼のレンズは、現在のみ固定され、過去も、未来も受入れる余裕はなかつたのである。

作者は、語り手として以上三人を選んだのであるが、彼等は、その動機と過程こそ異なるけれども、又意識的、無意識的の別はあるにしても、何れも等しく、時間の本質を無視し、その流

れに反抗した。そして、又、何れも等しく、敗北の憂目を味わねばならなかつた。彼等の人生に対する態度は、何れも、Compson 家崩壊の原因を内包するものであり、又その姿を象徴するものであつたのである。

第四の最後の章に於て、物語は、今や一族の手を離れ、純客観的な新しい視野に於いて物語られる。叙述は、あくまでも写実的であり、読者は、自ら判断し、解釈する立場に置かれる。Caddy も、その子 Quentin も、すでに場面を去つている。此の日、即ち、1928年4月8日は、Compson 家にとって、言わば、運命の日となつた。Jason には、あれ程の手痛かつた損害も、警察署長は、取るにも足らぬ私的な紛失事件として却下して了つた。Quentin の家出も、Compson 夫人が気に病む程には、世間は問題にしていない。長男 Quentin の死も、Caddy の名も、もはや、人々の口には余り上らない。Compson 家の心配事や悲劇にかゝりわりなく、Easter の祭りの行事は、予定の通り盛大に行われて行く。

此の章の中心は、黒人の召使、Dilsey に向けられ、Dilsey の書とも言うべく、彼女の姿は大寫しとなつて現われる。彼女は、召使と言うよりは、此の物語の中で、最も高く評価すべき人として、前面に引き出される。Compson 家の者達と、何等区別をされる事なく、彼等と同じ舞台に、全く同じ条件の下に立たされる事になつたのである。

Compson 家の人々は、はかない誇りや、虚栄と名誉の為に、もはや、物の本質を正しく判断し、行動する事が、出来なくなつていた。Benjy は、人間としてではなく、一族の罪を背負うものとして、一家の不名誉として、恥ずべきものとして扱われた。Compson 家の一族で、Caddy 一人が、Benjy を人間的に扱つた。然し彼女も亦、その恋愛と結婚によつて、一族の者達から、排斥と非難とを受けねばならなかつた。彼等は、人間的に理解し、人を抱擁する力を持たなかつた。Compson とは、その名を肖めるのみ、魂のない抜け殻の様な人々であつた。壊れかけたがらん洞の屋敷や、遅れた時計の様に、時代から取り残された人々であつた。

Compson 夫人は、空しい誇りに生き、病弱をひけらかし、面倒な事態に直面すれば、逃避してたゞ泣くばかり、そのくせ、口だけは喧しい。Caddy の恋愛に対しては、まるで、我が家の最大の不幸とばかり、黒服を纏つて歩き廻るだけで、Caddy の真の幸福など、真剣に考えてやろうともしない。Dilsey は、此の夫人と全く対照的存在として描かれる。Caddy のためにも、心から弁護した。冷酷な Jason の仕打ちにもよく耐えたが、必要な時には敢然として抗議する。

“You’s a cold man, Jason, if man you is. I thank de Lawd I got mo heart dan dat, evc.1 cf hit is black.” (12)

Quentin や Benjy に対しても、等しく、同情と真心をもつて、保護し、奉仕した。

彼女は、如何なる事態が起つても、それに即応して行動する。時が如何なる変化をもたらそうと、素直にこれを受け取り、無益な抗争を試みはしない。此の朝に於ける彼女の活躍は目

覚ましい。Luster がいなければ、自分でそれを補う逞しさを持つている。然も、いつもの自分の歩調を乱す事なく、落ち付いて処理して行く。嵐の中に、沈着に指揮する船長にも似た風格を備えている。口やかましい Compson 夫人の命令にも、気骨の折れる Benjy の世話にも、嫌な顔一つ見せない。Jason の八当りの激怒にも、うろたえる事なく、為すべき事を片付けて、指一本指させない。その昔、Caddy の子 Quentin を、此の家に引き取らねばならぬ羽目になった時、彼女は、なお、赤坊の一人育てる位、何でもない事であると、その大きな愛情と、抱擁力とを示したのであつた。赤坊を前に、当惑顔の一族の者に対して、

“And whar else do she belong.? Who else gwine raise her 'cep me? Ain't I raised eve'y one of y'all?” (13)

と言っている。何と力強い響を持つている事であろうか。過去の体験を基盤にして、現在に直面する者の、自信と勇気とを示す言葉に他ならない。

彼女は、理窟を並べる前に、先づ勇氣を持つて立ち上がる。此の強い力の源泉には、常に現在に全力を挙げて直面し、これに耐えて来た者だけが獲得する智慧がひそんでいる。それが、過去の総合として、未来の可能性として、の現在に生きる事の賢明さを、彼女に教えたのである。これによつて、彼女は、Compson 家の必然の歩みを、終始、その目で見届ける事が出来たのである。Compson 夫人の、極端に消極的ななげやりな態度と、対照をなす所以がこゝにある。Compson 家の人々は、時の本質を弁えず、これに激しい抵抗を試みた。その空しい努力が生み出した悲しみと苦しみ。それに対して、彼等は、唯、空しい怒りや叫び声をあげる事しか知らないのである。これに対して、Dilsey は、生きる事とは何であるかを、自らはつきりと学びとつていたのである。

作者は、人生の深い意味を、正しく体得し得る唯一の人として、Dilsey に高い地位を与えねばならなかつた。最後の章を、Dilsey の独白の形式としなかつた理由の第一は、そこにある。即ち、先ず、彼女を、黒人の召使と言う古い絆から解放しなければならなかつた。同時に、彼女自身も、そのこだわりから、脱出させる必要があつた。彼女が、Benjy を弁護して、社会の偏見に抗して、

“Tell um de good Lawd don't keer whether her smart er not. Don't nobody bud white trash keer at.” (14)

と主張し、人間総て平等であると心の叫びをあげたのであるが、これは又、Faulkner 自身が、Dilsey の為弁ずる言葉でもあつた。かくして、彼女を、全く客観的に、読者の前に紹介し、その公平にして偏見のない良識により、Dilsey を評価させる必要があつたからである。

作者は、Dilsey を、更に高く引き上げる為に、Easter の祈禱会に彼女を出席させたのである。Rev. Shegog'll は、その席上で、“神の前に於いては、総て平等であり、仔羊の血と思ひ出を持つ者だけが、神の甦り給うのを見るものだ”と説いたのであるが、その言葉は、いた

く、彼女の胸を打つた。これによつて、彼女自身、人生の真理を悟つた事を自覚するのである。これこそ、真の開眼でなくて、何であらうか。彼女は今や、最高の座についたのである。Compson 家の人々が、この最後の日に及んでも、なお、Quentin の家出事件に絡んで、相も変わらず、混乱と、騒音と、怒りの叫びの中で低迷している時、彼等と同じ situation に置かれ乍ら、彼女は、遂に神の復活は何を意味し、真の平和の実体は如何なるものであるかを、身をもつて悟つたのである。それは、黒人であれ、白人であれ、人間の尊厳を持ち、愛情と、誇りと、勇気と、犠牲と忍耐の美德を持ち続けた者⁽¹⁵⁾こそ、人生を知る者だと言う真理を具体的に示している。

作者が、此の物語について述べた言葉の中で、黒人達に対しては、言葉少くなく、“They endured.” と説明を付け加えているに過ぎない。その中の彼女に、何故に最高の椅子を与えようとしたか。Dilsey は、激しい怒りと、騒音の中に、自ら身を挺しつゝ、黙々と歩き続け、一步一步と高みに上つて行つた。真摯なその道程こそ、人間の生きる希望を托するに適切いと、作者は信じたからである。Compson 夫人も Jason も、この最後の客観的舞臺に於て、如何に生彩を欠いて見えることであらうか。幕切れのところで、漸くにして生き残つた Jason が、Benjy の恐怖の叫びを真めようとして、益々荒ら立て、狼狽その極に達した姿には、Luster が“身分ある者”に期待した水際立つて鮮やかな手捌は何一つ見出されない。Dilsey の偉大さを強調する以外の何物でもない。Jason は、完全に、端役の席に追いやられて了つたのである。更に又、此の客観描写は、Compson 家のあれ程の騒ぎも、混乱も、その悲劇も、広い視野の下で、長い時間的経過の中で眺める時、如何に、無意味で、小さいものであるかを、又これに反して、Dilsey の姿は、その条件の下では、如何に高く、大きく、輝きを増すものであるか、を対比して見せるためのものでもあつた。

以上の様に、作品の構成を検討してみると、此の物語は、単に、Compson 家の崩壊の姿を描いたものではなく、人間の生き方を、人生のあり方を、探求する事が、その主な目的であつたと思われる。従つて、たとえ、各章が、恰も独立した物語の様に、見事な構成を見せているとしても、此れを単独に引き出して、論ずる事は当を得ない。これは、むしろ、Dilsey を中心として読まらるべき作品であり、全体として論ずるのでなくては、意味がないと言わなくてはならない。内容と構成とが、実によく調和し、均整を保つており、周到な用意の下に、隙き間なく組立てられた見事な作品であり、Faulkner の偉大さを端的に示すものであると共に、M. Schorer の *Technique As Discovery* ⁽¹⁶⁾ の理論を最もよく、当てはめ得る作品でもある。

註

- (1) O'Connor: The Tangled Fire of William Faulkner P. 37
- (2) W. Faulkner: The Sound and the Fury (Modern Library) P. 290
- (3) L. Bowling: The Technique of the Sound and the Fury P. 177
- (4) O. Vickery: A Study of the Sound and the Fury P. 91

- (5) W. Faulkner : op. cit. P 9.
- (6) Ibid P. 123
- (7) Ibid P. 95
- (8) Ibid P. 199
- (9) Ibid P. 224
- (10) Ibid P. 214
- (11) Ibid P. 225
- (12) Ibid P. 225
- (13) Ibid P. 216
- (14) Ibid P. 306
- (15) The Stockholm Address
- (16) Mark Schorer: Technique As Discovery : (Critiques and Essays on Modern Fiction
by Aldridge)
- (17) J. Sartre : Time in Faulkner: The Sound and the Fury